

第 1 章

150年の歴史



はじめに

本校は明治9年石川県勸業場に農学科を設け開講したことに始まっている。以来、明治、大正、昭和、平成、令和の150年にわたり金沢、能登火打谷、加賀小松、松任と校地を変え、農業の改善発展に貢献してきた。この間、校名も石川農業講習所、石川県農学校、石川県立農学校と改め大正15年石川県立松任農学校となり、昭和20年の終戦を迎えている。一方女子教育の場として大正12年に創立された松任町女子実業学校が昭和2年、県に移管されて石川県立松任高等女学校となり多くの有能な卒業生を世に送り、戦後の学制改革により昭和23年総合制の松任高等学校として統合された。さらに地元の強い要望により建学の昔に帰り松任農業高校として再発足した。平成12年単位制の農業専門高校、翠星高校として現在に至っている。150年誌を発刊するにあたり、先人たちの歩みを振り返りその創造と努力の結晶を再確認したい。本校には記念誌として昭和41年に発刊された九十年史及び昭和50年に発刊された百年史、そして平成28年度発行の140年誌が存在する。これらを元に主な出来事を抜粋しまとめた。

1 明治期開校から石川県立農学校の松任移転まで

(1)草創期の農業講習所

明治9年4月

金沢区方勸業場において、同場職員島田直充が篤農家を集めて農書を講義する。

明治9年12月

金沢区方勸業場が県に移管され、石川県勸業場と改称され、同場内の一部に農業科を創設し、本県11等出仕の吉崎宇一を総括者として規模の整備に努めた。これを本校創立の起源としている。



吉崎宇一
本校の前身農業講習所の初代の所長

金沢市柿木畠（現県知事公舎付近）にあった旧壮猶館の建物内明治14年10月農学普通科・専修科（いずれも3年制）を置き、別に短期養蚕伝習生制を置く。

(2)石川県農学校時代

明治19年3月

石川県農業講習所（農業指導者養成学校）から石川県農学校（農業従事者の養成学校）へ改称し、本科・別科を置く。

羽咋郡東土田村字火打谷串田野に移転した。



火打谷時代の教科書およびノート



志賀町火打谷跡地の記念碑

明治23年4月

獣医学別科（2年制）が設置される。本県人がほとんどであるが、他府県人の入学者も増えてきた。

(3)小松校時代

明治29年4月

能美郡小松町字小馬出町に移転する。獣医学別科を獣医学科とし、就業年限を農学科と同じく3年とする。また撰科は養蚕と耕種の2科として修業年限1年とした。

明治33年4月

補習科が設置される。当時、本校以上の農学校は、東京農科大学と札幌農学校があった。そのような中で、本校の補習科が明治32年5月8日に、文部省告示第64号で徴兵令第13条の認定を受けたことは、本校の全国的な位置が、当時きわめて高かったことを意味するものである。

(4)石川県立農学校（松任移転）

明治35年3月

石川県松任町に本館、寄宿舎、畜舎、農場関係の建物が落成する。

明治35年4月

石川県立農学校と改称され、石川県松任町に移転する。



松任町移転当時の校舎正面



松任町馬場町に新築された新校舎(明治35年)

明治35年11月

養蚕室、生徒控室、調剤室、動物実験室、顕微鏡室、養虫室、蹄鉄室、手術室、解剖場が完成する。全国的にもその名が知られ、各地から入学者が絶えなかった。

明治40年

農事実習室、農場観測室、温室、炊事用納屋、肥料場、雨天体操場、銃器室が新築される。

明治42年9月

東宮殿下（大正天皇）の行啓の際、休憩に用いられた玉座。（椅子は記念として、本校同窓会資料室に大切に保存されている。）



東宮殿下（大正天皇）の玉座

明治43年

講堂、御真影奉安庫が新築される。

明治43年2月

本県庁より校旗が授与され、披露式が挙行された。

明治44年

燻豚室が新築される。



石川県立農学校時代の校旗

(5)明治期に来校した文化人たち

山崎延吉（やまざき のぶよし）

明治39年1月8日来校

明治6年生まれ、石川県金沢市山崎町の出身、明治27年旧第四高等学校卒業、明治30年東京農科大学（現東京大学農学部）卒業、福島県立養蚕学校教諭、大阪府立農学校教諭、明治34年愛知県立安城農林学校の初代校長となる。

「農民の道」を説きつづけて50有余年、全国農民の父と慕われる。自らを我農生と称し、「我は農に生まれ、我は農を生かさん」という信条を雅号に託し、農民道を説いて東奔西走した。

「上農は草を見ずして草を取る。中農は草を見て草を取る。下農は草を見て草を取らず。」延吉の農民道は、この短い文章の中にあますところなく表現されている。



山崎延吉

暁烏敏（あけがらす はや）

明治41年4月23日来校

明治10年生まれ、石川県石川郡出城村北安田（現白山市北安田町）の出身、北安田小学校・松任小学校・松任高等小学校卒業、共立尋常中学校中退、京都・大谷尋常中学校編入・卒業、真宗大学卒業。

真宗大谷派の僧、明治から昭和にかけて浄土真宗宗門の改革に活躍し、「浩々洞」を設立、近代仏教の確立を叫ぶ。また『歎異抄』研究でも知られる宗教家。



暁烏敏

柳田国男（やなぎだ くにお）

明治42年6月16日来校

明治8年生まれ、兵庫県神東郡田原村の出身、日本民俗学の創始者。東京帝国大学法科卒。農商務省に入省し、法制局参事官・宮内書記官等貴族院書記官長を最後に官界を辞任。朝日新聞社客員となり、論説委員として社説を執筆。『常民』『遠野物語』などの多くの著作をあらわし、「日本民俗学の父」と呼ばれる。



柳田国男

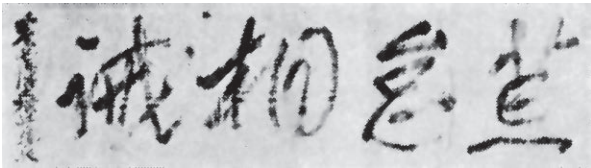
横井時敬（よこい ときよし）

明治43年1月26日来校

万延元年生まれ、肥後熊本藩士横井久右衛門の四男として生まれ、熊本洋学校を卒業後、東京駒場農学校農学本科を卒業した。卒業後は兵庫県、福岡県に勤務し、東京農科大学助教授・教授に進み、東京農業大学初代学長となった。その他にも農業教育の普及、発展に尽力した。



横井時敬



荒怠相戒（こうたいあいはいましむ）
農学博士・横井時敬の揮毫 本校第一体育館に掲示

2 | 大正期の県立農学校

(1)農学校の教育拡充

明治35年、小松より松任に移転した県立農学校は、全国的にその名が知られ、各地から入学希望者が絶えなかった。

教育方針（教授訓育）

教育はなかなか厳しく「授業中は真剣に勉学せよ、実習中真摯な態度で終始せよ」という具合であった。公德を重んじ人格の修養にまい進すること、すなわち人を作ることに重きを置く学校であった。先生と生徒は、教え習うというより、人格と人格の触れあいによる混然一体の農法伝授という感じがピツタリするふうであった。質実剛健、不言実行を旨とし、意志はあくまでも強く、どんな苦難にでも、耐えることができる忍耐力を養ったのである。学校側は生徒に対して信賞必罰の精神でのぞみ、どんなささいなことでも、看過することはなかった。



寄宿舎の朝礼（大正期の頃）



学生相撲優勝祝賀行列
優勝旗をもって町をねり歩く

大正6年

獣医科が廃止され、農科だけとなり、地域的な結びつきが多くなった。また、生徒は、県内の比較的裕福な農家の子弟が多く入学するようになった。生徒は、実習を通して、勤労の喜びを知り、晴耕雨読の精神を学んだ。また、職員も常に鋭意研究を怠らなかった。



果樹せん定実習

六星の起源

現在の「六星会」という同窓会の名称は、明治40年には六星会という校友会の愛称として親しまれていた。明治34年（1901）に県立農学校として発足したときに六星という愛称が定められたのではないだろう

か。当時県の中等学校設置のあり方として、先ず義務教育普及の要員養成のため、師範学校、普通教育向上のため男子に中学校、女子に女学校を、実業教育振興のために農商工校の設置をなし、この6つを教育の目標としたもので、本校校章の創定もこの頃と推定される。そして、この6つの異なった目的を持つ学校をそれぞれ一つの星と見做し、6つの光芒を表し、「農は国の本なり」の意を含め、「農」の文字を中央に据えたものと推察される。

創立50周年記念

記念式典は協賛会員来賓父兄らがたくさん参席して祝賀気分満点の大正14年9月13日、知事閣下並びに来賓が入場し、花火の合図と共に式が始まった。9時41分に一同起立して国歌斉唱。竹内秀雄校長が忝しく勅語を奉読して降壇されると全国で最も古い歴史を持つ本校に対する長知事閣下の告辞があった。来賓祝辞並びに祝電披露は、金沢医科大学長須藤憲三氏、石川県下郡長総代石川郡長城森省三氏、田中喜太郎松任町長、県下中等学校長五坪茂雄氏の祝辞があり、その他数名の祝辞があった。次いで各方面からの祝電を披露。盛夏のような暑さの中に生徒総代角屋喜八の答辞があつて、10時25分閉会した。

大正15年（1926）4月1日

石川県立農学校から石川県立松任農学校と改称し、修業年限5カ年制の林科を廃止して、修業年限3カ年（高卒）とした。



県立農学校校章

3 | 石川県立松任農学校時代



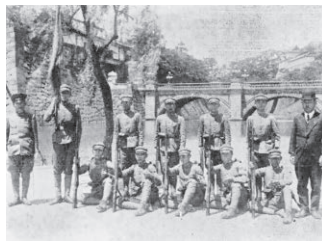
昭和10年ごろの農学校全景



石川県立松任農学校正面

(1)戦時体制下の農業教育

第一次世界大戦後の日本は、戦時中の空前の大繁栄のあとをうけて、慢性的な不況の中にあった。大正末期から昭和初期にかけて、都市部には失業者があふれた。昭和2年の金融恐慌、昭和4、5年頃の米国をはじめとする農業生産の不安など日本の経済的行き詰まりをみた。政府・財閥・軍部の目は、不況からの脱出の道を大陸に求めた。そして、昭和16年、太平洋戦争へ突入していった。



青少年学徒に賜りたる勅語発布記念
分列行進参加（昭和14年宮城前にて）

(2)松任農学校の教育

教育目標と校訓

本校の目的「実業学校令農業学校規定」により「農業、林業、蚕業二従事セムトスル者及獣医手タラムトスル者二須要ナル教育を為ス」

校訓

「忠孝至誠」・「勤勉力行」・「農業報国」

教育方針

- (一)教育勅語、青少年学徒に賜りたる勅語を奉仕し、皇国民たる光栄に感激して負荷の大任に堪えるの自覚を明確にすること。
- (二)興亜の理想と大和民族の使命を明確にす。
- (三)「農は国の基」の真意義に徹せしむ。
- (四)興隆の迫力と創造発展の能力を養う。
- (五)勤労に徹し身体を鍛錬し質実剛健の気風を振興す。

農産物の加工

本校は農家の加賀地方の農業センターの性格をもっていた。加工室では水飴の製造、青年団対象の講習会、婦人会に対する加工講習を開き、毎年大変盛会であった。ドラマチックな恐慌の中、農村不況はなかなか打開できなかった。このような時に中野義隆教諭は、農業恐慌を克服する手段として農産物加工の必要性を痛感していた。そのような折り、缶詰蓮根の研究を委託され、蓮根の缶詰製造化に成功したことを機に、県に農産加工室の設置を求め、農産加工室と機械設備一式が完備された。加工実習では、缶詰蓮根・白山なめこ・缶詰枝豆・トマトケチャップ・缶詰筍・トマトソース・トマト羊羹・福神漬・苺ジャム・馬鈴薯澱粉・漂白葛粉が製造された。



ソース製造

創立60周年記念祭

昭和10年9月17日、18日の両日に、本校を中心にして「創立60周年記念祭」が盛大に挙行された。記念式典は、17日、10時30分より、花火の合図と共ににはじまった。同窓生、父兄、知事をはじめ、来賓多数が出席された。国歌斉唱、教育勅語の奉読のあと、五坪校長の式辞、生駒高常知事の告辞、来賓の祝辞、生徒総代金田平進の答辞と続けられた。最後に、祝電が披露され、11時30分記念式典を閉じた。



60周年記念講演会

主な学校行事

- ・関西関東旅行
- ・中部地方一周旅行
- ・演習林生活
- ・満鮮旅行
- ・兎狩り



演習林実習

満鮮旅行

修学旅行のいくつかの中で特筆すべきは、満鮮修学旅行である。中等学校の修学旅行は国内に限られていたが、学校側では、農学校生徒の



将来のためには、満州、朝鮮への修学旅行こそ意義があるとの見解で、県を説得し満鮮旅行が許可になったのである。大正15年10月、最上級生の第1回満鮮旅行が行われた。旅行日程は約半月、旅費は70円を要した。

農業報国

- ・軍事教練
- ・特別大演習
- ・錬成教育
- ・国民精神総動員
- ・勤労報国隊

女子農業教育

太平洋戦争に突入するようになると、戦時食料自給体制確立の重要性から、農村労働力を補給する意味において女子の農業教育が盛んになってきた。本校でも農村労働力の補給と女子農業指導者の養成機関として修業年限2か年の女子農業科が、昭和20年4月に設置された。

江沼郡から河北郡にいたる高等小学校卒業者の中から、口頭試問と筆記試験を通して、入学を許可された第1期生は57名であった。

(3)松農健児の活躍

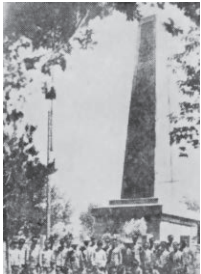
校友会の基調

校友会活動は、青年期人格形成にとって不可欠な教育活動であり、それは生徒の自主性を尊重しながら展開された。生徒は時代の児であり、六星の松農健児は大正末期から、昭和初期にかけての大正デモクラシー期の社会的風潮を敏感に反映し、自由な生徒気質が培われつつあった。そして、校是として「国家有用」の人材養成のための精神的支柱として「忠孝至誠」「勤勉励行」「農業報国」の校風を目指して校友会活動があった。

(4)本校付設教育機関

付設教員養成機関

大正7年4月に本校に付設された石川県立農業教員養成所は、大正10年4月、実業補習学校教員養成所と改称され、昭和に入ると青年学校教員養成所令の公布とともに、昭和12年4月石川県立青年学校教員養成



ハルピンにて



演習参加（校門を出る）

成所となり、昭和19年4月、石川青年師範学校として、河北郡津幡町に移転するまでの26年間、92名の卒業生を送り出してきた。名称は種々変更してきたが、いずれの時代にも勤労青年の教育を第一の目的とし、これらの青年を包括する青年団、さらに社会教育の中心人物を育成する教育機関であった。

徳田専修科

昭和初期の経済恐慌は農村に大きな問題を生み、その対策が種々と議論された中で、特に農業教育の姿勢の根本改革と、農村の中堅農業者育成を目的とする施設の設置が要望された。このような時代の要望を担って、松任農学校徳田専修科が、全寮1年制として、昭和9年4月、入学生17名で、鹿島郡徳田村旧石川県営種畜場跡で発足した。

以来、昭和10年農業教育訓練道場、11年満蒙開拓訓練所、あるいは傷病兵再教育所を併設しながら、昭和15年3月、35名の卒業生を送り出してその任を終え、新しく石川県立七尾農学校として生まれ変わるのである。



徳田専修科での早朝体操の一コマ

(5)戦争終結と学校

戦時教育の廃止

昭和20年5月、戦局の敗色が濃厚になり、本土決戦の声がようやく高くなってくるとともに「戦時教育令」「同施行規則」が制定され、学徒の「勉学停止」が決まった。全校生徒を食糧増産、防空強化に動員し、勤労一本に徹せしめめるという最終段階に到達し、ここに学校教育はくずれていった。このような激しい混乱のうちに8月14日、日本政府がポツダム宣言を受諾し、8月15日終戦日を迎えた。文部省の戦後教育方針は、軍国主義的、戦時的色彩を払拭し、文化国家・平和国家の理念に基づいて日本の教育を進めていくものであった。苦しい戦争が終わり、勤労働員が解除され、生徒たちは再び学校に帰り、山崎賢一校長は生徒たちを集めて、戦争の敗北での生徒への慰めと激励を行なった。本校は9月1日天候晴空の下、授業が再開された。

創立70周年記念

昭和20年9月17日、以前から計画されていた諸行事が、「創立70周年記念祭」として、本校や聖興寺を舞台に繰り広げられた。

記念式典には、第39代県知事伊藤謹二をはじめ来賓約35人と同窓生・在校生・父兄ら関係者1,600人が列席した。

4 | 松任女子実業学校

(1)創設前期

中等女子教育制度

我が国の女子中等教育は、明治4年官立女学校設立布達に基づき、翌明治5年に設立された官立女学校に端を発する。

明治30年頃、県内には官立では、石川県高等女学校があるのみであった。その後、明治42年の高等女学校令改正により高等女学校に実科を設置することが認められ、江沼郡立実科高等女学校、能美郡立実科女学校、鹿島郡立実科高等女学校、さらに明治45年に珠洲郡立実科高等女学校がそれぞれ設立された。大正期には、江沼、能美、鹿島、珠洲などの各郡立実科女学校は高等女学校に改編、県立に移管された。一方で、家庭婦人として必要な裁縫、家事、家業に関する知識・技能を与えるかたわら女子の常識を高める中等程度の普通学科を修められる教育機関の設立を望む者も少なからずあった。そこで、農家及び商家の家事に従事する女子に須要の教育を行うため、実業学校令、農学校規定、商業学校規定によって、石川郡実業女学校を設立する機を待ったのである。



北國新聞記事 大正12年3月7日

5 | 石川県立松任高等女学校

(1)県立松任高等女学校の創立

大正15年3月9日

松任町長はじめ関係者の努力により、実業女学校を高等女学校令に依る県立高等女学校に変更申請が文部大臣の認可指令があり、県立女学校が4月1日発足の見通しがついた。

高等女学校の発足

4月8日には在校生、女子実業学校の2、3年生の始業式が行われ、翌9日には、松任高女の入学許可者85名の入学式が午前9時から講堂に於いて晴れやかに挙行され、



石川県立松任高等女学校校門

(2)女子実業学校の創立と県移管

開校までの経緯

大正12年3月5日

松任町長より松第161号を以て文部大臣に本校設置の認可要請をなす。

大正12年3月6日

本校設置の認可申請を出した松任町長は、生徒募集その他の準備について賛同を得るために、付近村長18名と懇談会を開く。

大正12年3月22日

申請中の本校設置は難しくなる。そこで、松任町長は実業補習学校令に基く願書に変更して申請する。

大正12年3月23日

実業補習学校令に基く申請が認可されたので、松任町長は石川県知事に本校を松任尋常高等小学校に併置の認可稟請をなし、石川県知事より併置の件認可あり。

大正12年4月1日

石川県石川郡松任女子実業学校と称して開校する。

大正15年11月22日

松任町会は小学校の新築移転を機に松任女子実業学校を石川県に移管する。



松任女子実業学校制服

めでたく石川県立松任高等女学校は歩みはじめた。4月26日、石川県知事はじめ150名にのぼる来賓を迎えて盛大な開校式が行われた。学科目、学科課程は、修身、国語、外国語（英語）、歴史・地理、数学、理科、図画、裁縫、音楽、体操、実業（農業、商業）が行われた。



松任高女 第1回卒業生

(2)発展期の松任高女

昭和5年3月、女子実業学校最後の卒業生を送り、4月から単独の松任高等女学校となり、各学年2学

級、8学級編成（4年制）の学校となったのである。
良妻賢母を目指して



茶道

家庭の女子に須要な教養を身につけるための学習はどんな学習であったか、謹厳そのものの畠山校長はじめ歴代校長は週1回、修身の時間を担当され、女子に必要な道徳について人格を通しての指導をされ、講堂に於ける朝礼や各儀式などを通しての指導又然り、そして、ある時期には月曜朝礼に続いて「孝経、国体の本義」などを素材に全校生徒が人の道、大の道について先生方の講義を受けた。国語に出てくる教材に文学的なものも勿論多いが内容に於いて、女性の知徳を涵養するものが多かった。家事、裁縫が重視されたことは勿論である。又本校の特色でもある実業科に於いては、商業では商業一般・珠算、農業では校地内は勿論、校外にも実習地を求めて園芸・蔬菜・家畜の飼養と幅広く実習を通して身につけていった。



当時の国語教科書

通学状況

生徒は松任町を中心に、鶴来、美川、野々市、石川、柏野、笠間、宮保、一木、出城、御手洗、旭、安原、郷、中奥、林中、山島、舘畑、林、河内、富奥など、広範囲の地から通学していた。

校友会の活動

松任高女の校風樹立の原動となったものに校友会の活動がある。会長に学校長、各部にはそれぞれの先生が顧問として配属され各学年から選ばれた代表がその先生の指導のもとで、年間の計画から実施まで担当した。

主な学校行事

講演会、遠足と、4年生の修学旅行、音楽会、学芸会



音楽会



学芸会

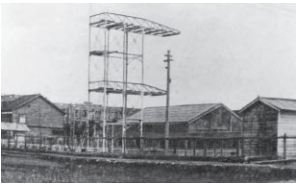
体育面での活躍

10月10日前後に行われる秋の運動会は恒例の学校行事であるが、春の運動会、学年対抗の排球、庭球大会、このほか対外的に行われる県下女子中等学校体育大会、加賀地区女子中等学校体育大会に本校の選手も出場した。

水泳松任高女

地元プールがあることは大きな強味で、毎年行わ

れる各種水泳大会への参加選手の層も厚く各種目選手を送り込んで頼もしい限りであった。特筆すべきもののうち、昭和7年7月22日に行われた北國新聞社主催中部中等学校水上競技大会各種目で松任高女のホープ吉本一子氏が個人優勝されたことである。これに続いて7月30日の全日本水上競技大会地方予選で、200メートル自由型1着、400メートル自由型1着を獲得、明治神宮外苑プールでの大会に出場等、自由型においては北陸水泳界ばかりでなく日本的な選手として大活躍された。吉本一子氏は卒業間もなく関学時代マニラ極東オリンピックに出場された大崎卯藤久氏と結婚され、夫婦揃って石川県水泳界の名指導者として大きく貢献された。



昭和3年に完成した松任プール

手取川氾濫による水害

昭和9年7月、1週間以上も降り続いた雨のため11日手取川堤防が決壊し、その沿岸一帯水害に見舞われる。当時この地方から通学の生徒もあり、緊急事態としてその処置に当たる。



昭和9年 手取川水害の跡（現川北町橋新）

創立10周年記念祭

昭和11年、創立10周年を迎える。昭和2年創立以来、確固たる教育信念のもと堂々と築いた校風・環境・内容共に充実し、天下の松任高女として対外的にも大きく活躍していたのである。

同窓会の歩み

昭和6年3月17日、本校卒業生の同窓会を創設し、直ちに従来本校に付設されていた女子実業学校卒業生の同窓会と合併して之れを「清輝会」と名付け、その発表会を午後1時から挙行了た。



恩師の出征送別会

**(3)戦時下の松任高女
戦争前夜時代**

関東大震災以後、世界恐慌の波は日本にも押し寄せて世は緊縮時代となり、人心を緊張させたのであるが、昭和5年頃から更に国際関係風雲急を告げ、満州事変、支那事変などが勃発し、日本にとって試練の幕開けとなるのである。そして、国民精神作興に関する実施事項が示され、皇民錬成の教育へと進みだし、昭和7年

上海に飛火して郷土師団の出征、恩師、生徒の父や兄の応召出征、当駅通過の出征兵士の見送り、宮様方の地方視察に伴う歓送迎とあわただしく、楽しい学園生活の中に戦争を身近に感ずる日が多くなり、まさに、戦争前夜の不気味さが漂い始めたのである。

宣戦布告

昭和16年12月8日、第4限講堂に於いて英米に対する宣戦布告の詔勅及び東条首相の講演放送をきく、そして12月10日に宣戦の詔書拝読式が行われた。

戦時編成

昭和16年9月19日～26日にかけて動員準備態勢をとるため、報国隊編成、警備団編成、学校防衛団編成、報国隊の自転車隊編成を完了する。ひとたび動員下れば、この編成でそれぞれ部署につき、行動開始の構えをとることができるようにした。

戦時の学習

戦時一色、食糧不足、人手不足の当時では学習よりも戦争に勝つことに重点が置かれ、昭和19年に至っては毎朝授業は1限のみとなってしまった。内容は全体に亘ることが原則のようであったが、地理・歴史の学習が多かったようである。講堂で朝礼の時、戦地からの便りが読んで聞かされ、千人針が教室にまわってくれば学習や作業に優先してこれを結び、出征兵士の死線を越えられることをひたすら祈ったのである。

戦い終わって

一億総火の玉となり、聖戦完遂の理想のもとに衣・食・住すべてを我慢し、「欲しがりません勝つまでは……」をスローガンに、来る日も来る日も緊張の連続、勉強よりもお国のための勤労に身を捧げて、その辛ささえ感じないで戦中を過ごした乙女たちが、昭和20年8月15日正午を境に、こまでの緊張感から解放されたその解放感は譬えようなない寂寥さで身を締め付けられ、じっと瞑目して一步を踏み出さなければならなかったのである。



分列行進



白衣縫製

(4)新教育制度とともに

新気運みなぎる学校

昭和20年9月、戦後の学校が始まった。文部省は「今後ノ教育ハ益々国体ノ護持ニ努ムルト共二軍国

的思想及び施設ヲ払拭シ平和国家ノ建設ヲ目途トシ……」といていたのに対して、G・H・Qはまず戦時中の教科書の本文の中で、軍国主義に関する箇所を削除する通牒を出した。修身、歴史、国語、地理などの書物の中で、軍国主義に関する箇所を墨で消すのである。さらに、12月31日の指令で修身、日本歴史、地理の授業は停止され、再開までは新聞の記事、論説などを教材として討議法による授業が行われることになった。

女学校にも新しい学園生活が始まった。それは、戦争で打ちひしがれた混乱から立ち上がった新生への息吹であり、自由という名の解放でもあった。云いたいことは自己の意見として憚ることなく発言し、興味があれば特技としてこれを深めることのできる時代が訪れたのである。

学制改革

昭和22年3月の教育基本法によって、6・3・3制度は確実となった。その頃から、これまでの高等女学校がこの制度でどのように扱われるか問題となり、いろいろ論議された。新制中学として、また高等学校としてか、悲劇的、楽観的観測が交錯した。殊に、新学制が男女共学を建前としたものであることから、風紀の頹廃を予言しているかのように考えられ、女子高校となることを切に望んだ。県下の公立高校は全部男女共学となった。心配された共学も、校舎の都合で現在在校の生徒が巣立つまではこの校舎で女の学園をまもることができ、むしろ生徒には男女共学に対する意味を模索することになった。

創立20周年記念

新学制の発足をみた昭和22年4月6日、創立20周年式典が挙行された。勤務職員を表彰式並びに成績品展覧会、祝賀会も併せて行われた。

綜合制松任高校へ

昭和22年4月15日、松任高等学校（普通部）の開校式が挙行された。この年の編成は、併設中学3年生（3組）、高校1年（3組）、高校2年（3組）高校3年（3組）と一応高校1年から3年まで揃った。しかし、高校2年は、高校2年生と呼ばれたり、高女5年と呼ばれたり、二つの呼称が存在したのである。

松任高女最後の卒業式

昭和24年3月7日、高校第1回卒業式（普通科3名）同3月19日、高女第19回卒業式が挙行された。この時の卒業生は、昭和19年戦争苛烈を極めている4月に入学した生徒である。学制改革によって高校2年生とも高女5年生とも呼ばれて茲に卒業式を迎えた。松任高等女学校最後の卒業生88名である。

むすびに

昭和2年4月松任町立女子実業学校の県移管を機に、県立松任高等女学校として発足以来22年、戦前、戦中を良妻賢母を目指す楽しい女の学園として、また、苦しくとも銃後の護りを果たす勤労学徒の学園として、創立以来作られてきた校風とともに意義深く受け継がれてきた。そして、かつて経験したことない敗戦の洗礼を受けた本校が、一時はその目標を失い棹をなくして波に漂う学園にさえ見えたと、昭和22年の教育大改革によって一大転換を余儀なくされながら

も、平和な学園を取り戻した。学科課程に於いても、戦後の学制改革の前に発展的な幕を閉じることになったのである。昭和24年4月から、名実ともに男女共学の松任高等学校として校舎をあとにし、次の教場へと吸収されたのである。



高女最後の修学旅行

6 | 総合制石川県立松任高等学校

(1)新学制の発足 新教育の成立

敗戦後の精神的な混乱を整理し、戦前の教育を否定し、因襲を引きずりながらも、少しずつ新しい教育理念が芽生えていった。昭和21年3月、米国教育使節団が来日し、連合軍最高司令部（G・H・Q）民間情報局教育課、日本側教育者委員、各種職域代表者と協議の末、報告書をG・H・Qに提出し、4月7日これが発表された。

政府は、昭和21年8月教育刷新委員会を設けた。26年6月に教育刷新協議会と改称、27年に廃止されるまでに、教育に関する重要事項を審議し、教育理念および教育基本法、学制、教育財政に関することなど最も重要な事項が答申された。

教育三法の制定

教育刷新委員会の答申に基づいて、教育基本法、（22年3月）、学校教育法、（22年3月）、教育委員会法、（22年7月）などが制定された。

(2)新制高校創設期 設置準備

昭和22年2月、文部省は新学制実施方針を発表し、小・中学校は22年度、高校は23年度、大学は24年度から実施することとした。本県では、22年3月、新学制準備協議会をつくり、中学校に関して審議答申している。さらに6月に教育刷新協議会が設けられ、県の諮問を受けて、新教育に関する一般的事項や、高校設置に関する根本方針を答申している。その後、軍政隊民間情報教育課と県との折衝により、以下の通りの設置案が作成された。

金沢市立工業及び女子普通校一校を除いてすべて共学とし、金沢に普通（家）3、工芸・商業各1、小松に普通（家）、実業（商・工）、農業各1、七尾に普通（家）・商、実業（農・工）各1、大聖寺に普通（家）1、松任に普通（家）・農1、津幡に普通（家）・農1、羽咋に普通（家）1、飯田に普通（家）1、輪島に普通（家・工）1、宇出津に水（普）1、柳田に農（普）1となっている。

松任高校の誕生

本校は昭和23年4月、松任農学校と松任高女を合併して、男女共学の高等学校として発足した。しかし教場は二つに別れ、元松任農学校に本部および農業部、元松任高女に普通部が設けられた。



高女から高校への進学者

(3)新制高校の再編成 三原則

新制高校の設置について、軍政隊が県に主張したものは、「小学区制」「共学制」「総合制」のいわゆる三原則であった。その中で、23年11月から発足した教育委員会によって新制高校再編成準備が進められ、24年三原則による再編計画が決定、4月から実施に移されることになった。

第1回卒業式

24年3月7日高等学校第1回卒業式が、第1教場馬場町校舎講堂において行われた。この日卒業証書を手にしたのは、普通課程女子3名、農業課程（農業科）

男子25名、同（園芸科）男子14名、同（農林科）男子19名、同（畜産科）男子14名、同（女子農業科）3名であった。

松任高校の再編成

昭和24年4月1日、本校は普通・農業・商業の4課程を設置する総合制、男女共学の高等学校として再発足し、小学区制が実施された。

石川郡内川・犀川・湯涌谷村区域。但し美川町・蝶屋村に現住するものは小松高等学校に、北陸鉄道石川線の通過する町村並びに金石線の沿線の村に現住するものは金沢泉丘高等学校に入学することができる。

この小学区制の実施により他校から転入する生徒が多数あった。一高：48名、二高：9名、三高：3名、金商：24名、工芸高：1名、石川師範予科：1名、金城：1名、小松：6名、柳田：1名、金市工：13名、小松実：2名、その他：88名これらと再編成前の本校生徒を加えて814名となった。

(4)新制高校の教育内容 教育課程

新制高校の教育課程の特色は、選抜教科制と単位制および大教科がとられていること、また教科学習とならんで特別教育活動が重要な内容をなしていることにある。選択教科制は、新制高校が旧制中学校、高等女学校、実業学校などの統一されたものであることから、生徒の多様な進路に対応した教育課程がとられるべきであること、生徒の主体性を尊重し、各教科の興味や資質に応じた教科を選択させ、個性的な成長を図ろうという二つの要求を満たすものである。

新制高校の教育課程は、生徒の主体性を大幅に認め、各自の個性能力を十分に発揮できるとともに、生徒の生活経験に基づく自主的な学習活動ができるようにつくられたのが特徴である。

新しい農業教育

敗戦による日本の社会的変革は、きわめて大きなものであったが、農業を取り巻く産業構造は、基本的条件においては大きな変化はなかったから、従来の小規模経営を前提とした自営者の養成を主眼とする農業教育に、大きな変化を加える必要は起こらなかった。

新しい農業教育の目標

第一に、民主社会の有為な形成者であること。

第二に、科学性と社会性に裏付けられた、合理的な経営感覚を持つ農業技術者および農業自営者の養成。

第三に、地域社会の構成員として望ましい資質を備え



第1回卒業生（農業課程）

た農業経営者の養成。

総合農業

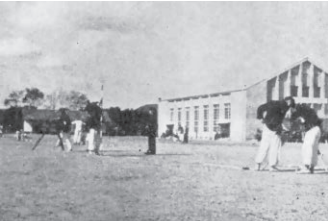
総合農業は、生徒がその土地の良き農民となるために必要な農業に関する知識・技能を総合的に発達させるように体系づけた教科である。特徴は農業経営を中心概念として、それに必要な教科の知識や技能の外に、共同生活に必要な自主性や社会性、さらに指導性の育成も考慮されて、効果的に構成されている。総合農業はおおまかにいって3本の柱で支えられているといえよう。教科の授業、農業クラブ、ホームプロジェクトなどで、特に農業クラブは米国を範とした色彩が強かった。

農業クラブ

農業クラブの導入は、農業教育の体系に新風を送り込んだといえよう。アメリカにはFFA（Future Farmers of America）があるが、これを原型として、日本の農業教育体系に採用されたのが農業クラブ活動である。日本の農業クラブ活動は、戦後CIEの職業教育官ネルソンの助言によって、いち早く新学制下の農業教育に採用されたが、昭和25年には、全国高等学校長協会農業部会によって全国連盟の結成が決議され、クラブ員代表2,000余名が参加して日本学校農業クラブ連盟（FFJ Future Farmers of Japan）が結成された。



耕運機競技



測量競技

プロジェクト活動の実施

農業科のプロジェクト活動は自分達の住んでいる地方の、農業や農村生活等に関するいろいろな問題をよく認識し、この問題を解決するために自分の手で計画実施し、さらに、その成果を反省することによって、自主的実践的な能力および合理的科学的に物事を考える態度を養うことが目的とされている。

ホームプロジェクト

ホームプロジェクトは、農業科や家庭科の学習指導法の一つとして、アメリカで体系的に発達し、日本では、第二次世界大戦後の学校教育や4Hクラブで広く行われるようになった。

ホームプロジェクトは専門知識や問題解決の能力を身につける上に、きわめて有効であった。この活動は、農業クラブの課外活動とも関連して、その成果は

校内発表会や県連・北陸・信越ブロックの大会で争われ、さらに、全国大会に出場する仕組みになっていた。

松高祭



ホームプロジェクトの研究発表
結局は平常の着実な研究と努力が物をいう

昭和23年本校が新制高校として出発し、農業部と普通部がそれぞれ、元松任農学校、元松任高女の校舎を教場として設けられたが、農業部では、この年の秋、松農時代の伝統を継いで収穫祭を行った。そして、農業に関する展示、農産物の販売・食堂を開設した。これが松高祭の起源となった。翌24年男女共学の総合制高校となり、文化祭も全校あげて行ない、文化クラブ関係の展示や演示も加えた。昭和25年には収穫祭、文化祭を統合して松高祭と称した。

校章、校旗、校歌

校章は、昭和24年生徒職員から公募し、選ばれたものをさらに検討して創作した。二組の松葉を組み合わせ高等学校の「高」を浮き上がらせている。校旗は、松任高女の校章を抜いて生地を染め直し、金糸で新しい校章を刺しゅうした。昭和26年の秋、待望の校歌が出来上がった。金沢大学教授川口久雄先生に歌詞を依頼したのであるが、先生はわざわざ本校を訪ね、2階の窓から眼下に広がる加賀平野や、遙か彼方の白山、さらに日本海に眼を転じて構想を練られ、これがそのまま歌詞に生かされて出来上がったのである。また作曲も先生を通じて、当時東京フィルハーモニー交響楽団の専任指揮者であった高田真一氏に依頼して出来上がったのである。



校旗

(5)定時制の課程

本県において、定時制の教育が本格的に取り上げられるようになったのは昭和23年4月である。まず、県教育部によって原案が作成され、石川県議会教育民生委員会、石川県新学制実施準備協議会に諮られて原則的な決定をみたあと、7月に定時制入学者募集要項が示された。この年は、第1学年のみを募集し、9月に入学式を迎えた。本校では、馬場町校舎を中心として、普通科（夜間）と農業科（昼間）を、美川町旧美川水産を分校として水産科（夜間）を於いて生徒を募集し、合計66名の生徒を入学させた。美川分校では、翌24年に水産科を廃止して普通科（夜間）を設けた。定時制が発足し、昭和27年に始めて普通科男子29

名、女子1名、農業科男子12名の第1回卒業生を送り出したのであったが、普通科は昭和38年に新設された松任高等学校へ移籍された。一方、農業科であっても、昭和28年度の総合制高校の解体にともなって、設立された松任農業高等学校に併置されることとなった。定時制入学希望者が減少していく中、昭和42年、本校定時制の農業科の生徒募集を停止するに至った。

(6)変容する新制高校教育

総合制の解体

昭和25年の朝鮮戦争をきっかけに、日本の政治、経済は急激な変ほうをとげていった。その中で、総合制を維持してゆくためには、地域による学校差を解消し、施設設備を充実させる必要があった。しかし、名門校の解消という能力的格差は学校単位では減少したが、一校内における課程別の格差は増大し、志望者の偏りが著しくなり、実業課程不要論も出てきた。また乏しい教育予算の枠内で設備を充実させることも困難であった。地域社会や産業界の総合制に対する不満は以上のような情勢から生まれた。このような動きの中で、本県では27年度から小松実高、七尾実高の分離の決定、28年度には本校松任農高の単独設置、29年度に七尾農高と分離または転化が決定していった。

小学区制の解体

昭和25年には34府県にわたって実施された小学区制は年々減少していった。本県では28年に本校が農業高校に転化したため、通学区域を変更することとなり、これが小学区制解体の直接の動機となった。

農業教育の危機感と松任農業高等学校の誕生

本校の前身である松任農学校は全国でも最古の歴史をもち、農業教育の名門校として自他共に認めていた。生徒は石川郡を中心に全県にひろがり、農家はもとより農家以外の有力者の子弟が集まり、卒業生は県内各階層にわたって活躍していた。新制中学が発足した昭和22年度は約980名、5つの学科を設置していた。23年に新制高校が発足したときはこれらを統合して農業課程とし、高校再編が行われた24年は普通課程340名、農業課程359名、商業課程40名、25年には普通課程530名、農業課程230名、商業課程80名と激減した。このまま放置すると農業教育、ひいては農業の将来に暗雲を投げかけるものとして憂慮され、単独農高として設備を充実し、農業に専念できる環境づくりが必要であるという気運が盛り上がったのである。

昭和28年4月、松任高校の生徒募集を停止し、松任農業高等学校が誕生した。

7 | 石川県立松任農業高等学校

(1)本校の成立

成立の経過

総合制高校が実情にあわない幾多の矛盾を含み、特に実業振興上障害があるとの観点から各界の不評を買い、実施の当初から改編の動きが生じることとなり、本県では昭和24年末、宇出津高校の水産学校設立の陳情、26年の小松高校より商工部分離独立の要望など相次いで実業高校の単独設立の要望となって現れた。このような動きの中で、本校において25年に農業短大設立運動として始まった。そして、26年、短大設立運動が頓挫し、専攻科設置と本校の独立設置運動へと転向した。

松任農業高等学校の発足

昭和27年12月13日に高等学校再編成計画・設置課程変更の件で臨時に教育委員会議が開かれ、松任高校は昭和28年度から農業課程だけの学校として、松任農業高等学校と改称することが決定され、農業課程、農林工学課程、農芸化学課程、農業経済課程、家庭課程の5科が設置される運びとなった。もちろん、現存の普通・商業・家庭課程の生徒が卒業するまで（昭和30年3月31日）は松任高校を存続させることになった。

校章・校旗・校歌

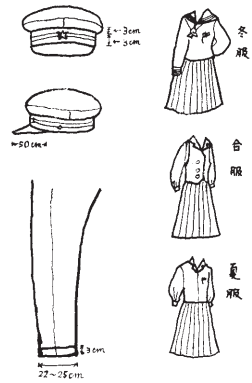


校旗

松任高校が存続した昭和30年3月まで、校章は松任高校のものを引き継ぎ、卒業を待って新しい校章を制定した。本校は松任農学校の後継者として、その校章であった「六星」を用い、中心の「農」に代わって「高」を配した。校旗は松任高校の生地を再び染め直し、校章を刺しゅうした。地色は紫紺である。校歌は川口久雄作詞、高田信一作曲の松任高校校歌「青雲の……」がそのまま受け継がれた。

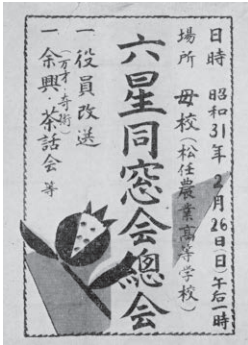


松高・松農高併設期の校門



三校同窓会の統合

石川県立松任農学校六星同窓会、石川県立松任高等女学校清輝同窓会は総合制松任高校が成立したときは統合しなかったが、昭和28年7月1日本校の開校記念式典が挙行されたのを期に、三校の同窓会統合の努力がなされた。昭和28年8月17日六星同窓会、清輝同窓会、松任高校同窓会は解散し三校同窓会を統合した新しい「六星同窓会」に発展した。



総会案内ポスター

創立80周年記念

昭和30年は創立80周年に当る。そこで、農業教育振興会、同窓会、育友会の合同評議員会をもち行事について協議した。創立記念日は同評議員会で審議され、農業高校の開校記念式の行われた日より7月1日と決定した。80周年記念行事は、追悼法会、記念式典、祝賀会が行われた。遠く関西関東からも同窓会員が集まり、その数は600名を超えた。この記念式にあわせて行われた行事生徒会主催の松高祭には、記念式参加の卒業生をはじめ、父兄、付近民など続々と来校し、各クラブ展示会場も食堂も、午後から開かれた舞踊演劇発表会も大盛況であった。中でも人気のあったのは、農産物（野菜加工品・肉加工品）即売場でよい売れ行きをみせた。運動場では野球、バレーボール、ソフトボールなどの交歓試合が行われた。

(2)専攻科の誕生

新制農業高校の設立を期して組織されていた期成同盟は、その前進が農業短大誘致のための運動組織であったので、新農高の独立設置を強力に押し進めていくと同時に、短大設立の含みを持った運動であったが、設立が難しくなった。そこで短大にかわるものということから、新農高の独立にあわせて専攻科の併設が推進された。昭和27年12月13日に開かれた臨時教育委員会で、松任高校から松任農業高校へと切り替えが決定されると同時に、専攻科の設置が決



専攻科入学記念写真



定された。その後、不振により34年4月より2年制から1年制へ移行した。

(3)本校の発展
馬場町校舎改築

明治35年、石川県立農学校として、総額5万円をもって新築した校舎は、幾千の人材を育成しすでに60有余年の星霜を経て、石段にまで水が溜まるほどの歴史を刻み込んでいたのである。その間に増設や一部改修がなされたが、今や修繕の余地なく危険校舎として、幾度か全面改築の陳情がなされるようになった。昭和34年12月24日校舎西側の敷地において地鎮祭を行ない、引き続き工事が開始され、翌年の2月24日竣工した。鉄筋3階建18教室を収容する本館である。



民有地農場及び校舎全景

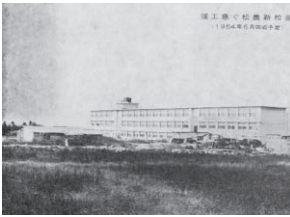
三浦現校舎の新築

馬場町校舎の改築第1棟は落成したが、前途にはいろいろ困難な問題が横たわっていた。その一つが文部省の設置基準と民有地の買収の問題があった。そこで、本校の大きな発展のために、改築促進とは別に移転という案が浮上した。農学校の将来を心配した田谷知事は農学校の敷地の問題が解決しない現状において、いたずらに手狭い現在地に固執しなければならない理由はなく新時代が要求する農業、斜陽と呼ばれる屋台骨を、立て直さなければならない運命を荷なう新しい農業具現の道場は、新天地にこれを求むべきであると述べている。本校移転が企画されたのはこの田谷知事構想によるのである。

三浦校舎の竣工と松任高校の設置

昭和37年12月5日、三浦町曠野に青竹を立てて地鎮祭を行い、引き続いて第1期工事本館の建築が始まった。本校の移転新築が決定した一方では、松任高校の設置が決まり、先に完成した馬場町新館1棟を含めた本校校舎を使用することになり、38年4月新入生が入学、新館を使用することになった。39年5月25

日から数日にわたって机、椅子、段ボール箱を満載したトラックが、三浦・馬場町間を往復した。



工事中の校舎



移転風景

校舎落成式

昭和39年11月12日、盛大な落成式を新装なった体育館で挙行了た。

創立90周年記念

校舎新築移転の整理のため、準備が間に合わず、創立90周年記念行事の実施は翌41年10月とし準備が進められた。募金、名簿、年史の編集は前年

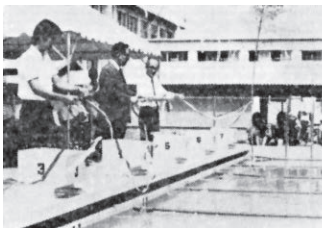


90周年記念会館

より開始され、11月には記念会館建設の計画が立てられた。記念会館は、同窓会、育友会の合同事業として、41年6月着工、同年10月竣工した。鉄骨づくり、外装はモルタル、内装は木造で、2階建生徒食堂及び寄宿舎にあてるべく施設が充実された。記念植樹には「だいおうまつ」「このてがしわ」及び同窓会会員内村又一寄贈の「ひとつばたご（一名なんじゃもんじゃ）」が植えられた。なお、このとき寄贈された書画には、中西県知事「天行健」、坂田栄一農林大臣「農学」の書と、同窓会員寅若繁「農婦」、宮田耕一「田園風景」の絵画がある。

施設の充実

水理実験室（41年度）、果汁濃縮プラント（43年度）、温室（46年度：本館前、鉢物室、切り花室、繁殖室、標本植物室）、水泳プール（48年度）、木津農場、39年三浦移転後も馬場町の農場実習地を使用していたが、これを県に移管し、木津町に水稻、飼料作物の実習地を買収し、そして、実習地への生徒輸送用にマイクロバスを購入した。通学路、メインストリート（49年度）、造園実習見本園、学校前に国道8号線が開通すると、環境保全という観点から学校と8号線間の土地を学校用地として買収する計画が盛り上がった。県の実験を得て、45年地主



プール竣工式

の理解と好意により16,000平方メートルを購入することができた。その後、造園実習見本園とする計画が立てられ、百年記念事業の中に組み入れられ、県の予算を待って、石川県民公社村田秀作技師の設計、立花造園、中部緑地株式会社の施工により50年4月着工した。

設置学科の変遷

昭和28年度～

全日制：農業、農林工学、農芸化学、農業経済、家庭

定時制：「農業（昼間）」

昭和32年度～

全日制：農業、農林、農業土木、農産加工、農業経済、家庭

定時制：「農業（昼間）」

松任普通高校の誕生

戦後復員、引揚で一氣にふくれあがった人口についてベビーブームの到来となり、その波はその後の社会に大きな問題を投げかけていった。小学校にあふれ、やがて中学校、そして進学率の漸増と相まって高校進学者の激増となって現れた。本県でも、PTAは大会において高校生急増対策の完全実施を決議して県に要望した。県教委は36年に高校の新設・教室の増設計画を発表、37年開校した羽咋工業高校をはじめ新設5校、その他4校について増設したのである。松任高校は38対策の一環として、普通課程を新設し、これに本校の家庭課程・定時制課程を吸収して38年4月、本校馬場町校舎内に誕生した。

畜産科の設置

旧農学校時代「獣医畜産科」は、後に「畜産科」として多くの有為な人材を育成したが、戦後は廃止されていた。これが畜産界からの要望があり、地域酪農の振興を目標として38年度に復活した。



搾乳実習

造園科の設置

日本経済の飛躍的發展、また一方で、産業飛達のひずみとしての各種公害、自動車排気ガスによる大気汚染が問題となり、都市計画・緑地計画が考えられるようになった。加えて、生活に余裕ができたため石ブーム、庭園ブームがはじまった。このような背景のもと、農林科を改編して「造園科」とし、41年度以降入学生に適用することとした。



造園科実習

コース制の後退

農業の成長が他産業に比し伸び悩み、その格差が増大するや、農業収入の不足分を農外収入に求めんとし、若年層から順次他産業に出向く者が増加し専業農家から第一種兼業に、更に第二種兼業にと落ち込み、農業に対する意欲はしだいに失われていった。このような情勢を反映して、高校進学者の多くは普通高校志望で占められ、農業高校への志望は漸減し、次には激減していった。定員を割る学科は44年度から目立ち始める中、畜産科のコース制維持は困難となり、45年度から農業科にわずかに形を残すだけで、これを廃止するのやむなきに至った。

食品製造科

農産製造科は昭和48年度入学生より食品製造科と改称することとなった。



8 | 石川県立松任農業高等学校 新しい百年への出発を

(1)開校百年から十年の流れ

開校100年記念

記念式典は県知事、県議会議長、教育長、松任市長、父兄来賓父兄らが多数参席して昭和50年10月30日本校体育館にて挙行された。開校100年記念事業として、記念図書・雑誌の刊行（松任農業高等学校百年史、祝賀記念回想録（六星百年）、六星同窓会会員名簿、祝賀記念グラビア、記念式典、特別記念事業開校百年記念の碑の建立、記念植樹、造園実習見本園の充実助成を行うとした。



式典会場（壇上は祝辞をのべる中西知事）



開校百年記念之碑（永井文部大臣揮毫）

造園施工実習棟・造園材料実習棟完成

前庭の造園実習見本園の整備に伴い、昭和56年5月に造園施工実習棟、造園材料実習棟が完成した。

地域への学校開放

本校の農業教育に対する理解を深めることを目的として、昭和55年度、「中学生の1日体験入学」を実施し、初年度は177名、翌年以降は300名を超える希望者があった。この体験入学は、県



平板測量実習

内の職業高校として最初の取り組みであり、後に県教委でも予算化し、県内の全職業高校で実施することとなった。また、一方で一般の成人を対象とした「県立学校開放講座」に取り組み、「やさしい園芸教室」、「ホーム・ベーカリー」の2講座を開講するなど、地域への学校開放に取り組んだ。

推薦入学制度の実施

兼業化が進む中で、新しい村づくりのリーダーとなる人材の育成の必要性から、目的意識を持った生徒、学校のリーダーとなる生徒の入学を目的として、推薦入学制度の導入を県に働きかけ、昭和57年度より、定員の2割を推薦入学させることとなった。

畜産科の募集停止

昭和30年代から始まった経済の高度成長は、農業ばなれを引き起こし、減反政策がこれに拍車をかける結果となった。農業高校においても、志願者の減少、非農家の子弟増加という形で影響が現れ、定員を大きく割るようになり、中でも畜産科は30%を割る事態となった。そのような中で、自営学科の内容検討と21世紀を目指す新しい農業を考慮して、昭和58年4月農業科、畜産科の募集を停止し、新たに農業畜産科・園芸科を置くこととなった。

農業畜産科、園芸科の設置

中核農家の育成と中堅農業指導者の育成は、本校の歴史と地域農業の実態からみて、本校の中心であることは免れない宿命である、ととらえ、本県の基盤である稲作に畜産部門を加えた複合経営を中心とする中核農家の子弟及び近代農業を理解した農村形成者の育成を目的とした「農業畜産科」、また野菜、果樹、草花部門でもニューメディア、ハイテクノロジーに対応した中核農家の育成、稲作プラス園芸の複合経営農家の育成を目的に「園芸科」が設置された。

園芸実験実習棟完成

新学科の設置に伴い、ニューメディア、ハイテクノロジーなど、新しい農業に対応するための知識・技術の習得に必要な施設・設備の充実が図られることになった。その中で、昭和60年10月、園芸実験実習棟が完成した。



クッキーづくり ホーム・ベーカリー

食品製造科の1学級増設

昭和56年度には志願倍率が1.3倍となった。中学卒業生の増加もあり、本校への定員増が県へ陳情され、内外事情から食品製造科の1学級増が決定され、昭和60年4月、食品製造科を2学級募集、5学科6学級定員240名の規模となった。

開校110年記念

昭和60年11月2日、開校110年記念式典が挙行された。

(2)開校百十年から十年間の歩み

食品製造実習棟完成

農業高校は、新しい時代の農業に対応した農業教育を行うとともに、地域農業のセンタ一的な役割を担わなければならない。昭和60年に食品製造科が2学級募集となったこともあり、昭和63年3月、食品科学実習棟が完成の運びとなった。



自動発酵制御装置（平成8年度完成）



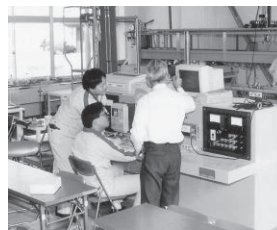
食品科学実習棟（昭和63年度完成）

運動場拡張整備完成

平成2年9月、運動場拡張整備完成。三浦町移転時から使用されてきた運動場を排水機能を向上するとともに拡張した。

農業土木実習棟完成

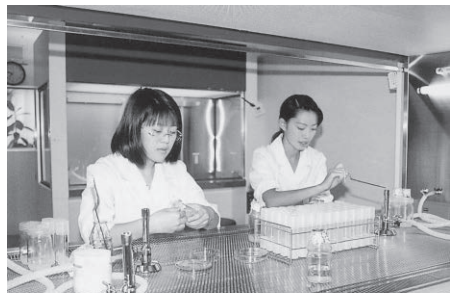
平成4年3月、東門付近にコンピューター制御の水理実験装置と40人一斉授業ができるコンピューター室を装備した2階建の実習棟が完成した。



環境工学実習棟、水理実験装置（平成4年度完成）

生物生産科、園芸科学科の設置

農業畜産科、園芸科の2学科の募集を停止し生物生産科、園芸科学科が設置された。



生物工学実験装置（平成6年度完成）

緑地デザイン科、環境工学科、食品科学科の設置

造園科、農業土木科、食品製造科の募集を停止し、緑地デザイン科、環境工学科、食品科学科を設置する。

食品科学科1学級減

平成8年4月、食品科学科を1学級募集とし、5学科5学級定員200名の規模となった。

生物生産実習棟・ピュアマートの完成

生物生産科の実習として、地域に開放された学校教育の一環として販売所ピュアマートが開設される。



生物生産実習棟 販売実習場「ピュアマート」（平成8年7月完成）

創立120年記念式典

平成8年10月25日松任市文化会館にて開校120年記念式典が挙行された。記念講演では日本人初の宇宙飛行士、秋山豊寛氏が「宇宙から見た地球と明日の農業」の題で講演された。

9 | 石川県立翠星高等学校

(1)開校百二十年から十年間の歩み

県立翠星高校と改称

平成12年4月、生物生産科、園芸科学科、食品科学科、環境工学科、緑地デザイン科の5学科の募集を停止し、総合グリーン科学科（定員200名）を置き、単位制・2学期制となる。校名は本校職員宮下敦実習教諭の発案で、現校歌に「時しらぬ松の翠よいただきて我等こそれり」とあるが、この「翠」は年中青々として絶えることなく成長し続ける姿を称えている。また、現応援歌「若葉の風」にも「翠」がうたわれている。「翠」は農業のシンボルカラーでもあり、さわやかな翠と校章の星をイメージして改称され、地域の人たちにも親しまれている。学校の木を「クロマツ」に制定する。

3号館 福祉実習棟完成

平成17年3月、3号館が新設され、福祉科の実習・講義専用の実習棟と図書館が新設された。



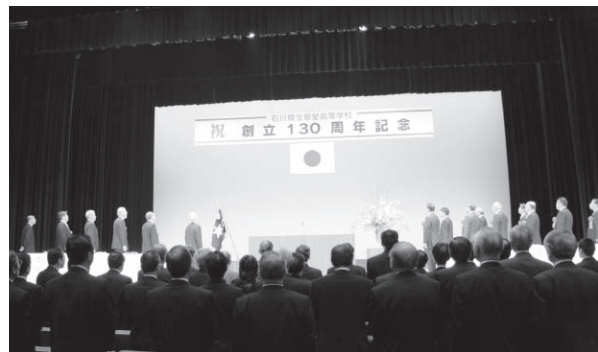
3号館 福祉実習棟（平成17年3月完成）

1学級減

平成17年4月、募集定員が200名から160名に減じられた。

創立130年記念式典

平成18年10月21日白山市松任文化会館にて開校130年記念式典が挙行された。10月19日には時計塔の除幕式と記念植樹が行われた。



(2)開校百三十年から十年間の歩み

6系から5コースへの再編

平成21年4月、食品科学・生物化学・園芸福祉・環境土木・緑地デザインの5コースが設置された。

5コースから3コース6分野への再編

平成28年4月、生物資源（農学・生物工学・生物活用）、食品科学、環境科学（環境設計・造園）の3コース6分野が設置された。

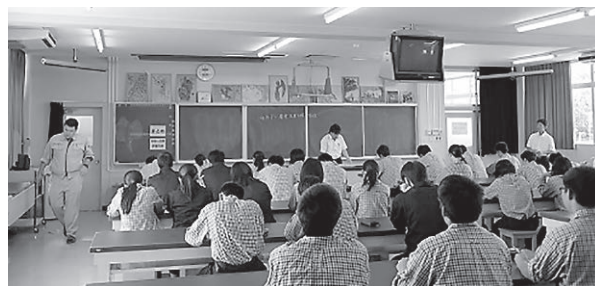
創立140周年記念式典

平成28年9月22日、白山市松任文化会館にて開校140年記念式典が挙行された。

(3)開校百四十年から十年間の歩み

グローバルGAP認証取得

平成30年10月、農作物の安全性などを証明する国際規格で、翠星高校は北陸三県で初めて取得した。



グローバルGAPを取得するための実技講習

キャリア教育に関する文部科学大臣表彰を受賞

平成31年1月、本校の取組について、キャリア教育の充実発展に尽力し顕著な功績が認められたとして、文部科学大臣表彰を受賞した。

食品安全規格（JFS-B）教育機関初の合格

令和元年11月、世界的な食品安全規格である「HACCPに基づく衛生管理」に対応したJFS-B規格について、国内教育機関として初めて適合証明に合格した。



自分たちでつくったHACCPプランを説明する生徒

3コース6分野を3コース4分野に再編

令和4年4月、生物資源、食品科学、環境科学（環境設計・造園）の3コース4分野に再編した。

第73回日本学校農業クラブ全国大会北陸大会

令和4年10月、本校が事務局をつとめた北陸大会は、石川・富山・福井の三県を会場に実施され、日本学校農業クラブ員や教職員・関係者等約5,300名が参加した。



令和4年度 北陸大会 報告書